

# 前漢鏡にあらわれた権威の象徴性

高倉 洋彰

- 
- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| 1. 前漢鏡と出土遺跡の検討 | 3. 前漢鏡の特質       |
| 2. 出土遺跡の特徴     | 4. 前漢鏡による権威の象徴性 |
- 

## 論文要旨

弥生時代の北部九州で採用された甕棺墓葬は弥生時代研究にさまざまな素材を提供している。これから性格を検討しようとする銅鏡もそのひとつである。弥生時代中期が中頃から後半へ転換する頃に甕棺墓への副葬が開始される銅鏡は、その出現の最初から、前原市三雲南小路1号甕棺墓や春日市須玖岡本D地点甕棺墓で知られるように、首長層の墓に集中して埋納されている（高倉 1992）。銅鏡が首長層に保持されることは以後にも継続していて、そこから銅鏡に宝器として、権威の所在を明示する器物としての性格が与えられている。筆者もそのように考えるひとりであるが、ただ、そのことを記述する場合にいつも引用すべき専門論のないことを気にしている。そこで以下に出現期の銅鏡、中国前漢鏡に例をしばって、性格を論ずることとする。

ここでは、弥生時代中期後半を前後する時期の16遺跡から出土している前漢鏡を、遺跡の分布状況、遺構の性格、銅鏡の質、副葬品の組合せについて、検討を加えた。

その結果、前漢鏡を出土する遺跡は平野や河川などの自然的な地形条件で区画される地域社会（後の『延喜式』の1～2郡程度）にあって、限定される傾向をもっていることがわかる。しかも、首邑とみられる須玖岡本遺跡や膝下の小地域の長を有するとみなされる門田遺跡が銅鏡を保有する福岡平野のように、遺跡群の動態から析出される中核的な遺跡に集中する。それは墓壇や棺構造の規模、盛り土の有無など、遺構に反映している。個人墓の段階にまで成長した、三雲南小路1号墓や須玖岡本D地点墓がその典型になる。前漢鏡を除外しても、墓そのものの構造や規模が卓越していることを指摘できるのである。

その典型的な個人墓である三雲南小路・須玖岡本の両墓に多数が集中して副葬される形で、面径15cmを越える大形鏡複合群として、突然、前漢鏡が出現する。両墓とも王墓と呼ばれる内容をもつが、そこに中国出土鏡に比較しても優れた作例の一群が集中しているのである。誰もが自由に入手できるものではないだけに、その背景にある漢朝からの下賜品としての性格を強く示唆している。他の副葬品との組合せにおいても、武器共伴型を基本とする点に武力を保有の前提とした実態がうかがわれ、突出するグループに厚葬型の副葬現象を認めることができる。これらのことから前漢鏡入手の契機に偶然性が排除される。

以上のような検討から、北部九州の地域社会を統べる隔絶した権力を担った首長（王）によって銅鏡に権力の象徴としての性格が与えられたこと、以後の日本列島の習俗の先駆けとなったことを理解することができよう。